■コメント

歴史地理学　57－1（273）56-57　2015. 1

平山昇報告と荒山正彦報告によせて

―昭和戦前期の娯楽と植民地ツーリズム―

内　田　忠　賢

私の役割は，第57回・歴史地理学会シンポジウムにおける平山昇・荒山正彦による２報告に対し，私自身の過去の仕事に引きつけながら，コメントすることである。

１）平山報告は，大正～昭和戦前期における，関西の私鉄や国鉄による活発な「聖地」参拝観光を，ナショナリズムの勃興の影響によるものではなく，娯楽の拡大や鉄道会社の収益という点から再検討したものであった。つまり，近代を扱う論者が主張しがちな，ナショナリズムがすべてを飲み込んだというストーリーではなく，娯楽がナショナリズムを取り込んだという新鮮な視点である。以下，関連する，私が以前，調べた事例を紹介しよう。

まずは首都圏[1)]。1925（大正14）年に東京湾岸，千葉県津田沼町（現・習志野市）に開業した谷津遊園である。京成電気軌道（現・京成電鉄）が経営した大遊園地は　戦時下の1938（昭和13）年，その娯楽性をカモフラージュするため，「遊」の一字を取り，国報健康を目的とした錬成道場「谷津園」と名乗ることにより，しぶとく経営を続けた。

次は関西圏[2)]。1929（昭和４）年に開業した生駒山遊園（大阪府・奈良県境）である。平山報告でも扱われる大阪電気軌道（大軌）による経営。開業当初より現在に至るまで，目玉となるアトラクションは大飛行塔である。高さ30ｍの鉄塔の上，直径20ｍ四方にアームを伸ばし４機の模擬飛行機を吊るして回転する遊具である。大阪平野を一望する，この人気の設備は戦中，時局に合わせ，「航空道場」という軍事訓練の施設を名乗った。また，標高が高いため，防空監視所として，軍に協力したという。なお，生駒山系東麓にあった，同じ大軌の経営による菖蒲池（あやめいけ）遊園でも，飛行塔が建設され，遊具ながら「航空日本大展覧」という軍事色が強いイベントに活用された（1943年）。娯楽施設が時局と折り合い，生き延びた事例である。

谷津遊園，生駒山上遊園のような単純な例を挙げるまでもなく，ナショナリズムが娯楽を飲み込んだというよりも，娯楽がナショナリズムをしたたかに取り込んだ事例は少なくない。

２）荒山報告は，同じく戦前期における植民地ツーリズムを，メディア（特に案内書とリーフレット）を資料として，詳細に整理・分析する。

私は以前，当時の高等教育機関による植民地への修学旅行について調べたことがある。具体的には，東京女子高等師範学校（女高師，現・お茶の水女子大学）による1939（昭和14）年の修学旅行[3)]。行き先は，朝鮮半島および満州，当時，国策も後押しした，いわゆる「満鮮旅行」である。参加者の予習成果（冊子）や旅行報告書などの分析内容を，ご存命（私の調査時）の参加者へのインタビューから裏を取った。この事例をもとに，植民地ツーリ

ズムとメディアという視点から，2点紹介したい。

女高師による満鮮旅行は，当時の教授，飯本信之が引率した。飯本は当時，日本地政学協会・理事の要職にあり，ドイツ地政学の影響下，『政治地理学』などを著した地理学者である。調べ始めた当初，この満鮮旅行は，飯本地政学の影響により企画立案されたと予想した。しかし，見学場所やルートを，同時代の他校（旧制高校，高等師範，高等商業など）の満鮮旅行と比べたところ，大差ないことに気付いた。日露戦跡および邦人入植地，満州鉄道沿線の主要都市などである。それもそのはず，当時の満鮮への修学旅行は全て，国策会社ジャパン・ツーリスト・ビューロウ（日本国際観光局）が関与していた。旅行者の安全確保という点でも，ジャパン・ツーリスト・ビューロウの指定ルートから外れて旅行することなど不可能だった。学生たちの記録を読むと，ジャパン・ツーリスト・ビューロウと日本陸軍や関東軍，満蒙開拓団との関係を垣間見ることができる。当然ながら，植民地ツーリズムは時局柄，国策旅行社とは無縁ではありえない。

また，メディアという言葉を，案内書やリーフレットなどマスメディア的媒体と限定せずに，情報を伝達し，記録する媒体と広く考えれば，満鮮旅行に参加した女子学生たちが執筆，編集したガイドブックや報告書も注目に値する。旅行前に作成した『歩む』というガイドブックでは，当時，内地（東京）にて流通した満鮮関係資料を知ることができる。また，彼女たちの現地への認識も記されている。帰国後，作成された報告書『所感集』には，ジャパン・ツーリスト・ビューロウ，軍や拓殖機関など当局側の意向に流されない，臨場感溢れる旅行の印象を伝えている。ある学生は満州旅行の感想として，次のように記す。

「端的にいへば，現実と理想の間にはまだまだ距りがある様に思はれた…之らの異民族の中に於ける日本人自身の生活態度にも随分考えさせられた…結局，道義国家の建設などは実現し得ぬ美しい夢なのではないのだらふか」

満州国の現状，外地での日本人について，この時代，彼女は厳しい批判を展開した。

いずれにせよ，平山・荒山の両報告は，近代日本の娯楽やツーリズムを積極的に再検討する有意義な試みであった。全般的に低迷する人文科学や社会科学の中，観光（ツーリズム）研究，娯楽研究の勢いはまだ衰えていない。歴史地理学からの，更なる発信を期待したい[4]。

（奈良女子大学）

〔注〕

1）内田忠賢「「娯楽の殿堂」の軌跡―高度経済成長期における東京郊外の遊楽空間―」（成田孝三編『大都市圏研究―多様なアプローチ―（下）』大明堂，1999），24-46頁。

2）内田忠賢「レジャーランドと奈良」（奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド』昭和堂，2009），237-249頁。

3）内田忠賢「東京女高師の地理巡検―一九三九年の満州旅行―」お茶の水地理42・43号，2001・2002，31-36頁・25-32頁。

4）現代風俗研究会編『現代風俗　物見遊山―旅と娯楽の風俗学―（現代風俗研究会年報33）』新宿書房，2012。